

# 第1章 戦場

千葉での終戦

## 海からの砲撃 岩に腹を押しつける

清野 隆さんのお話から

○徴兵検査 兵隊にふさわしい性質や才能などを判定するために身体や身上を検査すること。

○特攻隊 特別攻撃隊の略称。特に太平洋戦争中、体当たりの攻撃を行った日本陸海軍の部隊。

終戦間際の昭和十九年（一九四四年）、私は二十歳で徴兵検査を受けました。この年からは、十九歳の人も検査を受けることになりました。それだけ兵士が必要になってきたということでしょう。当時は、男は軍隊に行かないと一人前に見られなかった時代でした。体格がよくない私は、兵隊に行けなかったら困ると思い、本心とはうらはらに「特攻隊やります。」と言いました。とにかく徴兵検査のときは特攻隊に志願するということが合格できました。旭川で歩兵部隊の訓練をしていたときは、規則正しい生活で、しかも戦地ではありませんから、比較的気楽でした。

その後、千葉へ移動したらいろいろ大変になりました。ご飯以外は普通の軍隊と同じですが、ご飯に混ぜるものがソラマメなのです。あれは、慣れないせいか随分こたえました。ソラマメもお菓子として食べるのはいいのですが、ご飯にまぜたらだめなのです。柔らかいけれども、おいしくないのです。

また、アメリカの艦載機の攻撃を受けることもありました。海面すれすれに飛んできて、陸にきたら少し上がって、動くものを何でも機関銃で撃つのです。撃たれたらすぐに道路の側溝に伏せて、過ぎ去るのを待ちます。道路縁の木に弾が当たったり、銃弾が刺さったりすることもありました。

千葉では海防監視と敵前上陸を防ぐのが任務でした。アメリカの艦隊が房総沖に侵攻してきたときに備えて、破甲爆雷という木でできた一キロぐらいの箱に火薬をびっしり詰めたものを

○キャタピラ 鋼板を帯状につないで、車輪の周りに取り付けた装置。ブルドーザーや雪上車の車輪を思い浮かべると分かる。

○地曳網じびきあみ 沖合いに網を張り巡らし、それを陸上に引き寄せて魚を獲ること。またはその網。  
○千歯せんばこき 米を脱穀するための道具。

持って、上陸してくる敵の戦車のキャタピラの下に行く訓練をしました。自分が入るのではなくて、破甲爆雷はこうばくらいを入れるのですが、とにかく戦車のキャタピラのそばまで行かなかつたらそういうことはできないのです。兵隊は海岸縁ぶちで、直径一メートル、深さ一メートルくらいの、目だけが少し見えるくらいの穴を掘り、そこに入って待機たいきしているのです。小銃しょうじゅうなど普通の装備は持っているのですが、そんなものは役に立ちません。

それでも、千葉県は東京と比べるとわりと安全だったと思います。漁師の家で兵隊みんなで地曳網じびきあみをひく手伝いもしました。それから、農家でも千歯せんばこきなどを使ったソバや麦の脱穀だっく作業を手伝ったりしました。それは本当にのどかな感じで、自分のふるさとへ帰ったような気がしました。

しかし、戦時体制ですから、厳しいこともありました。一回しかありませんでしたが、房総半島ぼうそうはんとう沖に敵艦隊が接近中という情報が入りました。「Aが何隻せき、Bが何隻、房総半島に接近中。上陸の公算こうさん



訓練の様子

イメージ図

海からの砲撃ほうげき 岩に腹を押しつける

○駆逐艦 砲・魚雷などを主要兵器とし、敵の主力艦・潜水艦・航空機を撃破するのを任務とする小型の快速艦。

○砲兵 大砲を使って攻撃する兵隊の種類。

大なり。各隊直ちに戦闘配置に着け。」という命令が出ました。暗号ですから、Bが戦艦でAが駆逐艦だというふうに決まっています。そうすると、訓練していたとおり破甲爆雷とシヨベルと小銃を持って海岸縁に出て、五メートルおきに穴を掘ってそこに潜るのです。そのとき、近くの住民の人たちは「上陸してきたら我々はどうなるのでしょうか。」と心配して、私たちも返事に困ったことがあります。私たちが「とにかく山の中に入って逃げていった方がいいよ。」ぐらいしか言うことができないのです。

それから、一度、砲撃を受けました。それは私たちが狙った砲撃ではなく、班長の話では四キロぐらい離れたところにある砲兵陣地を狙ったものではないかという話でしたが、海岸から潜水艦が砲撃しているのです。撃ったときの砲撃音がすごいのです。防空壕の中に入っても、腹がすごく振動するのです。実戦の経験のある班長たちは、「こら、おまえら、岩に腹をひつけておけ、岩に腹を押しつけて見ていろ。」と言うのです。撃たれているのを見



陣地が砲撃されているところ

イメージ図

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

○進駐 軍隊が他国の領土に進軍し、とどまっていること。

○忠君 君主に忠義をつくすこと。

ているだけなのに、あまりにも衝撃が大きいので腹を岩から離してはだめなのです。実践に近い経験をしたのは、敵前上陸の待機をしたときと、この砲撃の二回だけでした。

私どもは、神の国というか、戦争に負けたことのない国、国民ということでは教えられてきましたから、戦争に勝つことを疑うことはありませんでした。八月十五日に玉音放送があるということは教えられたのですけれども、聞くことはできませんでした。ですから、負けたという実感はありませんでした。実際に敗戦になったことが分かったときの思いは、これからどうなるのだろうかということだけでした。とにかく、千葉県から北海道へ帰りたいと思いました。

北海道に帰ったのは、終戦後の九月二十日ごろでした。函館に着くと港の近くには、潜水艦にやられたのか、爆撃でやられたのか分かりませんが、船が何そうも沈んで、煙突などは赤くさびていました。

それから、アメリカ軍が進駐してくるといいう話になって、敗戦のみじめさを味わうことになりました。一番みじめさを感じたのは、今まで教えられてきた忠君愛国とか、目上の人の言うことは忠実に聞かなければいけませんとかいうことが全部だめだというふうになったことです。ずいぶん戸惑いました。

今の若い皆さん方は本当に規律正しく、しっかりしていて素晴らしいと思います。これからも戦争のない時代をいつまでも続けていってほしいと思います。どんなに世の中が変わっても、戦争だけはない平和な国であってほしいと願っています。

DATA

平成22年度厚別区平和事業  
聴き取り

- ・平成22年6月10日
- ・厚別区役所



清野 隆(せいの・たかし)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市厚別区在住